JSRECCE Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

日本保育学会会報

2023年9月1日　発行
編集・発行 一般社団法人
日本保育学会
編集責任者　上田敏丈

JAPAN SOCIETY of RESEARCH on EARLY CHILDHOOD CARE and EDUCATION

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-2-2 B,R ロジェ T-1
e-mail：hoiku.info@jsrecce.jp
http://jsrec.or.jp

●第187号●

●特 集● 第76回大会レポート

5月に新型コロナウイルスが5類相当となり、社会全体もアフターコロナへと移行したように感じられます。コロナ禍で培われたオンライン学会の良さを活かしつつ、5月に第76回大会が開催されました。本号では、大会へ参加いただいた会員からの報告を中心にお送りします。

第76回大会を終えて

第76回大会実行委員長　伊藤　良高

2023年5月13日（土）・14日（日）の2日間にわたり、熊本学園大学を会場に、第76回大会を開催しました。この3年に及ぶ新型コロナウイルス感染症の世界的拡大の影響を受けて、本大会は、第74回大会・第75回大会に続き、オンラインでの開催（一部は対面式）となりました。本来であれば、2016年4月の熊本地震及び2020年7月の熊本豪雨からの復旧・復興の過程にある熊本県にお越しいただいて、各地の豊かな自然環境に触れながら、保育に係る様々な情報交換や人的交流をしていただきたいと願っておりましたが、残念ながらその思いは叶いませんでした。しかしながら、自主シンポジウム57件、ポスター発表489件、口頭発表175件等多くの企画・発表と1956名の会員（一般参加者を含む）の皆様の参加を得ることができましたことは大変嬉しい限りです。

本大会は、九州・沖縄ブロックにおいて、福岡県以外では初めての開催となりました。熊本県として、これまで日本保育学会の受入経験はなかったため、2021年2月、開催についての打診があったときは迷いもありましたが、名誉なことであるのでともかく取り組んでみようと決意しました。そして、同ブロックの理事・評議員と相談しながら、九州・沖縄が一つとなった大会を目指すという方針の下、熊本県を中心に、九州・沖縄各県の保育者養成校の教員31名から成る大会実行委員会を組織しました。そして、大会日の決定から始まり、大会テーマの検討、基調講演や実行委員会シンポジウム等の企画、運営委託業者の決定、大会通信の作成・配信、口頭発表・ポスター発表・自主シンポジウム等の受理・決定、座長の決定・依頼など、順次、作業を進めていきました。大会直前には会議も頻繁に開かれ、事務局長・事務局次長ほか実行委員会委員の皆様には校務等多忙のなか、粉骨砕身級のご尽力をいただきました。

大会テーマは「保育を創る、未来を拓く～保育学の創造をめざして～」とし、子ども・保護者・保育者の権利という視点から、新時代の保育をデザインし創造していくこと、そのために、保育実践を支える保育学を構築していくことを課題としました。熊本県での開催を意識して、関連する企画もいくつか盛り込みました。1つは、蓮田健・慈恵病院理事長兼院長による基調講演「なぜ産んだ我が子を殺し捨てるのか？～この非日常、非常識な世界を紐解く～」です。講演では、同病院が運営する「こうのとりのゆりかご」への預け入れや担当者にのみ身元を明かす「内密出産」を希望する女性の境遇を、予期しない妊娠以前から抱えてきた困り事、生きづらさの発露であると捉え、精神医学や保育の観点から丁寧に支援していくことの大切さが唱えられました。2つは、シンポジウム「教育学とのつながりから創造する保育学の未来―『子ども Agency』という概念を通して―」です。義務教育への接続期にある子どもたちの育ちについて、熊本市私立幼稚園・認定こども園の二人の園長から話題提供を受け、OECDの提唱する「子ども Agency」概念を踏まえながら、保育学の在り方について検討を加えました。ほかに「新時代の保育とソーシャルワークを展望する―保護者、子ども、保育者が輝く保育を目指して―」、「熊本の保育実践」も企画され、熊本の最前線の保育実践が多くの会員に紹介され好評を博しました。最後になりましたが、本大会の開催にあたって、熊本学園大学事務局をはじめ後援諸団体や広告掲載企業、学会事務局等の皆様には多大なるご支援を賜り、深く感謝申し上げます。

● *Profile*

伊藤　良高（いとう　よしたか）
第76回大会実行委員長
熊本学園大学社会福祉学部子ども家庭福祉学科教授、桜山保育園理事長・副園長
専門分野は保育学・教育学。保育制度・経営、幼児教育行政、保育ソーシャルワークの理論的・実践的研究に取り組んでいる。

口頭発表 K-C-2 発達論・心身の発達・保育計画など

中村　恵

第76回大会での口頭発表においては、オンラインでの質疑応答や討議に参加した。なかでも、活発な

討議が行われたK-C-2発達論・心身の発達・保育計画などについての報告をしたい。ICTドキュメンテーションや、2歳児における創造的場面、幼児の描出傾向、保育環境の評価、アイディアから広がる世界等、それぞれ視点は異なるのだが、議論が進むにつれて、子ども主体や子どもの主体性という共通のテーマがより鮮明になった。また、お茶の水女子大学こども園の実践においては、「人間関係」という領域を超えて、子どもたちが「よりよい社会の一員」であろうとする姿を分析されていたのが大変印象深かった。子どもを行為主体として捉えると社会という概念が重要となり、保育の受け手ではなく参画者として捉えることにもつながっている。また、人と「モノ」との相互作用の中で創発過程を検討した研究においても、2歳児は保育の受け手ではなく参画者として位置づいていた。

乳幼児期の教育は「見えない教育方法」（バーンステイン、1985）と呼ばれ、教育の目的や内容、評価等が実践者以外には可視化されにくい。しかし、子どもが遊びを通して自己発揮することにより、保育者は子どもの多様な側面に気づき、言語化することが可能となる。私たち研究者は保育者の傍で、子どもが遊びの中で主体的にモノやコトに関わる過程をとらえて分析しようとする。その際、動画や写真等で可視化されたものを断片的に捉えるのではなく、その文脈も含めて重層的に捉えることが非常に重要となると改めて考えさせられた。そして、私たちは今以上に子どもの声を聴く姿勢が問われていくだろう。

近年、スマートフォン等のデジタル機器の普及が進み、日常生活にとって必須のツールとなりつつある。さらに生成型AI（ChatGPT等）をはじめAI（人工知能）が身近な存在となってきている。学校教育においてはGIGAスクール構想により、一人一台の端末利用が実現し高速ネットワークも整備されつつある。保育・幼児教育現場においても、ここ数年でICTの活用について語られることが多くなってきた。一方で、保育におけるICTの活用とは、単に商用ベースで提供されたシステム等を活用することではないと考える。ICTを活用すると今まで見えなかったものを可視化することが容易になり、成果物を簡単に作成することができる。しかし、重要なのは、成果物を作成することではなく、可視化したものにどのような意味を生成するか？ということで、これはAIによって自動化できるものではない。むしろ子どもと保育者や研究者、さらには保護者が参画することによって意味を見いだすことにつながるだろう。

● *Profile*

中村　恵（なかむら　めぐみ）
畿央大学　教育学部　現代教育学科　教授
保育におけるICTの活用とカリキュラムの開発に評価を絡めた方法、フィンランドの幼児教育システムに関心をもち、調査研究を行なっている。

ポスター発表　P-A-2 保育内容（健康・人間関係・環境・言葉・表現）Ⅰ

石沢　順子

このセッションでは、運動遊びの方法や環境の工夫及びその評価、身体の形態と運動能力の関係、保育者・学生の運動遊びに対する意識など、「運動」に関連する発表が多くを占めていた。それぞれの発表を拝見して、「運動」という共通点はあるものの、その切り口は多岐にわたることを改めて実感する機会となった。その中からいくつかを報告させていただく。

「子どもの走力を発揮するための種目への提言～力を出し切る達成感・充実感を得る指導と関わり～」では、運動場のトラックでかけっこを行う際に、従来型のカーブを多用したコースから、直線を長く走れる位置にスタート・ゴールを変更したことで加速しやすくなり、記録も向上したことが報告されていた。また、ゴールテープや新聞紙を走って切る遊びを取り入れたところ、子どもたちが意欲を持って最後まで走り抜ける感覚を身に付けられたとのことだった。例年通りという枠にとらわれず、子どもたちが楽しく取り組み、運動能力を十分発揮できる方法や環境を工夫する姿勢が大切だと感じた。

「5歳児の新聞紙遊びにおける動作分類からみた運動遊びの手立て」では、新聞紙を用いた身体表現遊び「忍者になって遊ぼう」の指導実践を一斉保育形式で行い、その前後での新聞紙を用いた自由遊びにおいて出現した遊びや動作の種類を整理・比較していた。その結果、いずれの自由遊びでも新聞紙で道具を作る場面や作ったもので遊ぶ場面などにおいて、操作動作及び操作動作を中心とした複合動作が多くみられており、新聞紙の可塑性や軽くて扱いやすいという特徴によると考えられるということであった。また、事後の自由遊びでは、指導実践で行ったようなダイナミックな活動がみられ、イメージを持った身体表現遊びへと発展したことが確認されたとのことであった。一斉活動での指導実践がその後の自由遊びで経験できる動きや遊びの広がりに効果をもたらした点については大変興味深く、他の活動でも参考にさせていただきたいと考えた。

「幼児の足裏と重心動揺の関連性について」では、浮き趾（ゆび）の本数が2本以上になると重心動揺の軌跡が有意に長くなり、ふらつきとの関連性がみられるという報告がなされた。また、足趾（そくし）を十分に使って立つ、動くという経験の不足により浮き趾が生じやすくなると考えられるということであった。日々の活動の積み重ねが体の形態にも影響する可能性があることを意識しながら、体を動かす機会を保障する必要があると改めて感じた。

オンライン形式のポスター発表は、短時間で質問への回答を入力しなければならない場合もあり、慌ただしくなりがちな印象を持っていたが、本大会では質疑応答の内容だけでなく、筆頭発表者の入退出時にもコメントを入力するなど、在籍確認の方法も工夫されて

いたと感じた。運営にあたられた実行委員の皆様と座長・副座長の先生方にも心よりお礼を申し上げる。

● *Profile*

石沢　順子（いしざわ　じゅんこ）
白百合女子大学 人間総合学部 初等教育学科 教授
専門分野は身体教育学。近年は、健康教育の中に STEAM 教育（Science, Technology, Engineering, Arts and Mathematics）の視点を取り入れたプログラムの開発や実践にも取り組んでいる。

国際シンポジウム
保育理念としての子どもと遊び
ー韓国と日本における保育学の研究を根拠とした実践の創造ー

吉田　真弓

今回の保育学会は３回目のオンライン開催となったが、その中で、今年の国際シンポジウムは日本と韓国をオンラインでつないでディスカッションを実施するという、76回の保育学会史上初の試みとなった。話題提供者として、韓国からは金 慶喆（김경철:Kim Kyung-chul）先生（韓国教員大学校幼児教育科教授）、嚴 正愛（엄정애：Ohm Jung-ae）先生（梨花女子大学校幼児教育科教授）、日本からは川﨑道夫先生（高田短期大学育児文化研究センター研究員・三重大学名誉教授）の３名をお迎えし、お話しいただいた。

はじめに、金 慶喆先生が「幼児と教師が共に創っていく遊び中心の教育課程」についてお話しくださり、幼児が部屋の窓から差し込む光を見つけたことにより、そこから光と影を取り込んだ様々な遊びが展開していく様子、そしてその遊びが深まっていくための教師の援助等を紹介してくださった。次に、梨花女子大学校師範大学付属幼稚園園長を８年間経験された嚴 正愛先生より「遊び、学び、教えの統合のための韓国幼児教育の実践」についてご講演いただき、クラス全員を巻き込んでのキャンプ場づくりに発展していった活動の実践事例を紹介していただいた。今回紹介していただいた事例は、遊びと教育を統合することの難しさを感じている幼児教育現場からの、遊び、学び、教えの統合のための韓国幼児教育・保育の挑戦的な実践事例であった。最後に、川﨑道夫先生が「遊び中心・子ども主体の保育に向けて－三つの問題」と題して乳幼児期の遊びの発達の理解や遊びの原動力、遊びの過程についてご講演くださった。３名の先生方の話題提供を受け、指定討論では、勅使千鶴先生（日本福祉大学名誉教授）より、遊びとそれ以外の活動における学びおよび指導内容や、遊びの指導をどのように考えればよいかといった質問が提示され、保育者の指導や、幼児の主体的な遊びと目的のある活動についての認識について深めるきっかけとなった。

韓国では 2019 年に教育部よりヌリ課程（2019 改訂ヌリ課程）が告示されており、その冒頭の「ヌリ課程の性格」には、「幼児中心と遊び中心を追求する」と明記されている。今回、討論の中心となった話題は、幼児の主体的な遊びや遊びを通して学びを育むための保育者の指導についてである。学びを育むために保育者がどのような指導をしていくかによって、幼児の遊びに対する主体性が左右される。遊びと学び、そして保育者の指導を含めた実践を考える際、韓国の幼児教育・保育現場で葛藤があるように、遊びと教育そして保育者の指導の統合の難しさは、日本の保育者も葛藤しているところであると考える。しかし、その葛藤の中で、ちょうどよい落としどころをみつけて実践を積み重ねていくことが大切であろう。今回のシンポジウムでは、韓国の保育も日本の保育も子どもの主体的な遊びを大切にした保育を目指していることが共有された。今後も保育者の実践を更に深めるために交流を続けていくことが大切であると感じたシンポジウムであった。

● *Profile*

吉田　真弓（よしだ　まゆみ）
名古屋短期大学保育科　准教授
専門は幼児教育学・保育学。子どもの人間関係や仲間づくり、クラス集団の発展に関心をもっている。また、韓国幼児教育（ヌリ課程、オリニジップ評価）に関する研究に取り組み、日本の保育現場での自己評価に関する研究にも携わっている。

自主シンポジウム（J-C-6、J-E-10）報告
保育者自身が保育を振り返り
試行錯誤する意味

田島　大輔

今大会のテーマは「保育を創る、未来を拓く～保育学の創造をめざして～」であった。保育を創っていくのは紛れもなく保育を行う保育者と子ども達であるが、保育を創っていく保育者がどのような振り返りをして、保育の質の向上に努めていくのかは、大きな課題のひとつである。この課題について、現在、どのような実践や研究が行われているのかを学びたいと思い、大会２日目の J-C-6「トライアル・アンド・エラーから学ぶ質の向上を目指す保育マネジメント（2）」と J-E-10「保育実践に根差した評価の探求：エピソード研修から考える」の、２つの自主シンポジウムに参加した報告をさせていただく。

まず、トライアル・アンド・エラーから学ぶ質の向上を目指す保育マネジメント（2）では、「うまくいかない」と葛藤し、「これでいいのだろうか」と苦悩するプロセスにこそ、保育の質の向上を目指す学びの契機があることに着目している。今回の発表では試行錯誤、トライアル・アンド・エラーを繰り返すことが保育の質向上の要因のひとつとなることを踏まえ、様々な立場のそれぞれの視点から議論されていた。 話題提供・指定討論者は、ミドルリーダー、管理職、保育者と立場は違うのだが、「肯定的な関係性」、「自身の変容」、「保育を共に作る関係性」、「対話の重要性」などという共通するキーワードが浮か

び上がった。企画者の１人である井上眞理子氏（洗足こども短期大学）は、保育の営みの中で多様な様相が相互に影響し合う点に触れ、「ずれ」や「葛藤」の受容が大切である事についても示唆し議論が行われた。

つぎに、「保育実践に根差した評価の探求：エピソード研修から考える」では、まず企画の趣旨として国内外で、保育の質保証のための評価のあり方が大きな問題として論じられ、保育の説明責任を求められるようになってきた昨今、保育の成果を可視化しなければならないという社会的風潮が高まってきている事に触れている。つまり、客観的 / 主観的、診断的 / 形成的の評価方法のどちらかだけを採り入れるのではなく、組み合わせとバランスをアレンジして実践し検討し続けていく必要性や、日本独自の新たな評価のあり方を見出すことの意味を問題意識とし、保育の評価の在り方の１つとしてエピソード研修を基にした議論を行っていた。東村知子氏（京都教育大学）は、エピソードを書くという行為は、他者と共有することに難しさを感じながらも、それは必ず明日の保育につながるという積極的な意味と価値を見出している点について示唆し、古賀松香氏（京都教育大学）は、エピソードの特徴として共に子どもを感知し保育を創る者として、問う者も同時に問われる相互主体の評価である。わかりたいからこそ問う。ここに育ち合う相互主体評価のかたちが生まれる事を示唆し、さらに保育に活きる評価とは、保育者が育つ評価であり保育の瞬間に身体が動くかたちでなされていくこと、保育実践のその瞬間に活きる評価である事が示唆され議論された。

以上のシンポジウムから保育者自身が保育をどのように振り返り、試行錯誤するその意味について保育実践を基に議論していくことの意味を感じた。このことは容易ではないが、あらためてその必要性や意味を感じつつも、二項対立についついなってしまうことや立場の違いで語ってしまう課題もある。その事を踏まえつつ、保育を考え振り返り試行錯誤することの意味を今後も考えたい。

● *Profile*

田島　大輔（たじま　だいすけ）
和洋女子大学　人文学部　こども発達学科
実践・計画・省察の中で保育者や保育の周辺に起きるズレやそのプロセスについて研究している。また、即興的な思考や、学びが創発されやすい環境、自立的に学ぶ集団の在り方について、インプロや部活動等の視点からも研究を進めている。

実行委員会企画シンポジウムＤ「保育学・日本保育学会のこれまでとこれから」

野口　隆子

長年保育学研究・日本保育学会に関わってこられた無藤隆氏（白梅学園大学名誉教授）、秋田喜代美氏（学習院大学・日本保育学会会長）の話題提供と、若手（大学院生・研究者・保育者）３名からの質問に答えるという対話形式で実施された（西南学院大学門田理世氏企画）。当日は和やかであるが率直かつ切り口鋭い応答が交わされた。

まず、濱名潔氏（認定こども園武庫愛の園幼稚園）が保育学とは何のための学問で、保育学研究の理論的基礎とは何か、近年の動向を見据えた学会の役割とはついて、若手会員としての真摯な悩みから生じた質問・提言を挙げた。次に池田竜介氏（九州産業大学）から実践知や専門性という概念への質疑があがり、言葉の機能や園内での伝承、意味付け、園間のバリエーションをとらえる視点、歴史的視点からの研究などアプローチが議論された。中ノ子寿子氏（西南学院大学大学院生）は、学会が学びの場として開かれアクセスしやすいのか、意見表明権について質疑を提示した。入会手続きに関する質問があがった後、即現状確認と検討がおこなわれ、声が実現に向けて動くきっかけとなることを目の当たりにできた。

無藤氏は、自身 70 歳定年を設定しているとユーモアたっぷりに語りつつ、数十枚に渡る論説を資料として準備され、貴重な学びとなった。研究が実践にどう役立つかではなく役立つという過程を、保育が文脈化・身体化される過程を、丁寧に見る必要があるという。研究（者）と実践（者）は明確に分かれるものではなく、グラデーションがあり、概念の移動や循環がおこなわれている。対比や一方的批判は生産的ではない。保育学の研究知見とは、学会論文だけではなく、著作や研究紀要など膨大にありそれらを評価・反映していくのかが問われること、様々な学問との交流、組織的実践活動への着目が必要だと述べた。

秋田氏は、学会の取り組みと、保育者の学びや実践知、実践者コミュニティ、すべり台に関する研究知見を紹介した。会員世代別構成に関する報告（40 代以下が非常に少ない）から、学会は生涯学び続ける保育研究者・実践者のための場であり多様なニーズがあるが、知の継承と生成、知的ワクワク感を創り出すネットワーク形成のために、若手が声を出しやすく、多様性を生かし対話を増やす仕組み・仕掛けづくりが必要と指摘した。登壇者の熱心なやりとりが続く中、司会の脇信明氏（長崎大学）は「勇気ある質問と真摯に答えていただく姿勢、こうした対話がこれからの保育学会の在り方として大切だ」と述べている。

印象的だったのは、保育の研究はもっと面白くなる可能性を秘めており、若手・研究者・実践者は「もっと生意気でいい」（無藤氏）という言葉である。また、「保育学会は私の学会、私たちの学会」（秋田氏）という参加のあり方が大事だとあらためて感じた。チャットに続々とコメントがよせられ、中には、指導教官に大きな励ましをいただいたような気持ちになったとあり、大いに共感した。

● *Profile*

野口　隆子（のぐち　たかこ）
東京家政大学子ども支援学部子ども支援学科教授
専門は保育学。現在は主に保育文化と専門的発達、保育におけるウェルビーイング、絵本をめぐる環境に関する研究に取り組んでいる。保育の場で研修に参加しながら保育の面白さ・奥深さを感じ、探求をする日々である。

日本保育学会研究奨励賞を受賞して

〈論文部門　保育学研究 第 60 巻第 1 号〉

研究奨励賞（論文部門）を受賞して

入江　慶太

この度は大変名誉ある賞をいただき、ありがとうございました。受賞の連絡はまさに青天の霹靂で、当時は「なぜ？」が頭を離れませんでしたが、時間が経った今、「日本保育学会が『研究を通して、もっとこの分野の保育を充実させなさい』と背中を押してくれているのかな」と思えるようになりました。

本研究は、小児病棟に勤務する保育士（病棟保育士）の専門性に焦点を当て、彼らは保育所保育指針や全国保育士会倫理綱領に示されている保育の専門性に加え、「医療的知識・技術」や「他職種との連携」をより強く意識していること、「専門職としての責務」に課題を残していることを明らかにすることができました。

ところで、論文タイトルを見て、彼らが活躍する現場が目に浮かぶ方は少ないと思います。中には「院内保育のことだよね？」と思われる方がおられるかもしれませんが、厳密に言えばそれも間違いです（院内保育は「院内にある施設で病院勤務のスタッフの子どもを預かる保育」のことを指します）。小児医療に関連のある保育の形態としては、「病棟保育（本稿）」や「病児保育」、「外来保育」などがありますが、正確に把握しておられる方は残念ながらごく一部だと思います。その説明を丁寧に行うことができなかったことが本稿の反省点の一つです。今後は、小児医療の中で小さくとも確かに息づく保育を、初めての人に分かりやすく発信して世の中の認知度を高めていきたいと思います。今回の出来事を通して、病棟保育士の存在や価値に一人でも多くの方が気付いてくれれば…と願うばかりです。

最後になりましたが、本論文に貴重なご示唆をいただいた広島大学大学院社会科学研究科の湯澤正通先生、ノートルダム清心女子大学の湯澤美紀先生、そして何よりも、日々の多忙な業務の中、アンケートに様々な思いを託してくださった全国の 315 名の病棟保育士の皆様に厚くお礼申し上げます。

● *Profile*

入江　慶太（いりえ　けいた）
○所属：新見公立大学健康科学部健康保育学科　准教授
○研究テーマ：小児病棟や病児保育室で病気の子どもに関わる保育士の専門性や医療的ケア児等の保育、また、そういった業務に携わる保育士の養成に関心を持って研究を進めています。

〈論文部門　保育学研究 第 60 巻第 1 号〉

研究奨励賞（論文部門）を受賞して

加藤　孝士

この度は、日本保育学会、研究奨励賞（論文部門）を賜り、誠にありがとうございます。本研究の調査にご協力いただきました保育者の方々、東日本大震災から今まで様々なことを教えてくださった福島の保育者の方々、関口はつ江先生をはじめとする共同研究者の先生方に感謝申し上げます。また、査読委員や選考委員の先生方をはじめ、保育学会の諸先生方にも感謝いたします。誠にありがとうございました。

私は、東日本大震災後、保育学会の放射能災害下の保育問題検討委員会に所属し、福島の保育施設に足を運ぶ機会がありました。その際、自身も困難な状況の中で、子どものことを第一に考え、保育されている保育者の姿を目の当たりにしました。そして、その姿や保育を行う上での困難を広く知ってもらいたいと考え、現在まで研究を続けてきました。

その中で、本研究は福島の保育者のやりがいや困難に注目した研究であり、調査仮説は、「放射能災害下で保育をしている福島の保育者の困難は未だに高い」というものでした。しかし、調査を行うと、福島の保育者（経験年数多）は、保育のやりがいが高いことが明らかとなり、その理由を探るべく自由記述やインタビューデータの分析を行いました。その結果、震災直後の保育者同士の連携や保護者支援の経験が、現在の保育のやりがいに影響を与えていることが示唆されました。このように、震災後の保育者の取り組みの効果の一端を示すことが出来、そしてその姿を示した、本研究を評価していただけ、福島の方々に少しだけ恩返しできたと感じています。ただし、本研究は、あくまでも 1 つの側面しか表現できておらず、まだまだ伝えたいことは山ほどあります。

震災から 12 年が経過しましたが、放射能災害は未だ継続途中の出来事ですし、福島から学ぶべきことは数多くあります。それらを伝えるためにも、この奨励賞を励みとし、今後もさらに精進していきたいと考えております。

● *Profile*

加藤　孝士（かとう　たかし）
長野県立大学　健康発達学部
子育て支援・親育ち支援の研究を行っていましたが、東日本大震災をきっかけに、放射能災害等の社会変動が、保育へ与えるの影響を研究しています。

日本保育学会研究奨励賞を受賞して

〈発表部門　第 75 回大会　口頭発表〉

第 67 回日本保育学会研究奨励賞（大会発表部門）を受賞して

小島　好美

第 67 回日本保育学会研究奨励賞（大会発表部門）を賜り、大変光栄に存じます。栄誉ある賞をいただき、心より感謝申し上げます。

日本保育学会第 75 回大会において「幼稚園教諭の中堅期以降に認識された困難とキャリア発達を支えた要因についての検討－ TEM から捉えたキャリア発達プロセスに着目して－」を発表し、この度、受賞いたしました。

本研究に取り組み始めた当初、中堅教諭の「困難」を明らかにし、キャリア発達を支えた要因を検討するというテーマで、保育者に迫ることに不安もありました。しかし、現場の先生方が、自身の保育、子どもたちの育ち、力を尽くした行事や、心を通わせた保育者仲間について語る姿が、いつも私の背中を押してくれました。ご協力いただいた時期は、幼稚園の二学期という大変お忙しいタイミングでしたが、「いいですよ、わたしで良ければ協力させていただきます。」という言葉をいただき、保育に携わる人の、懐の深さに触れたことをはっきりと記憶しています。受賞の喜びを、ご協力をいただいた先生方、丁寧なご指導を賜りました、平野麻衣子先生（東京学芸大学）、駆け出しの研究者である私を温かく見守って下さいました、東京家政大学子ども支援学科の先生方、武蔵野短期大学の先生方、皆様に、改めて御礼申し上げ、お伝えしたく存じます。

本研究では、中堅教諭が、リーダー的役割を果たす過程で、責任を仲間と分散して担おうとする振る舞いや、後輩教諭たちのフォロワーシップに目を向ける姿が捉えられました。今後は、中堅保育者のリーダーシップや、相互関係にあるフォロワーシップについて、研究してみたいと考えています。

この先、研究者として迷い、戸惑ったとき、この賞が、励みとなり、そして、研究姿勢を見つめる機会を与えてくれると思います。今後も保育の営みと真摯に向き合い、研究に精進してまいります。この度は、研究奨励賞を賜り、誠にありがとうございます。

● *Profile*

小島　好美（こじま　よしみ）
武蔵野短期大学 幼児教育学科
保育者のキャリア、専門性とライフステージにおける役割や経験との関連について、研究テーマとしています。現在は、中堅保育者が、実践者間のリーダーシップをどのように図るのか、フォロワーシップとの双方向から生成される保育の場、組織づくりに関心があります。

日本保育学会保育学文献賞を受賞して

保育学文献賞を受賞して

砂上　史子

この度は、拙書『「おんなじ」が生み出す子どもの世界－幼児の同型的行動の機能－』（東洋館出版社）に対し、日本保育学会保育学文献賞を賜り、身に余る光栄に存じます。

本書の研究は、お茶の水女子大学大学院修士課程において取り組んだ研究を出発点とし、白梅学園大学大学院博士課程の学位論文「幼稚園における子ども同士の同型的行動の研究」を基に、加筆修正を加えたものです。同型的行動の媒介（身体の動き、物、発話）に注目して、幼稚園の遊び場面での事例を質的に分析し、幼児の仲間関係における同型的行動の機能を明らかにしました。本書は、幼児期の仲間関係が「同じ動き」などの微細な行動に積み重ねによるものであることを説明し、その積み重ねを可能にする幼児期の遊びの意義を示唆しています。幼稚園等で子どもたちがのびのびと夢中になって遊ぶことを通して健やかに育つことの重要性の一端を、本書によって伝えることができたならば望外の喜びです。

今回の受賞にあたり、長期にわたる観察を温かく受け入れてくださった公立 M 幼稚園の皆様に改めて深く御礼申し上げます。観察を通して、幼児教育の現場に身を置き、多くのことを学ばせていただいた経験が研究者としての私自身の芯であり続けています。そして、本書の理論的支柱となった「保育における身体知」の論考とともに、長きに亘りご指導くださった無藤隆先生に心より御礼申し上げます。

本書の事例は、平成元（1989）年の幼稚園教育要領の改訂によって、日本の幼児教育が「環境を通しての教育」「遊びを通しての総合的指導」へと大きく転換した後の実践におけるものです。その改訂に深く関わられ、私を幼児教育の世界に導いてくださった恩師の故・岸井勇雄先生、故・森上史朗先生のご学恩にも改めて感謝いたします。

今回の受賞を励みに、今後さらに一層の努力を重ね、幼児教育の実践に寄与する研究に取り組んで参ります。

● *Profile*

砂上　史子（すながみ　ふみこ）
千葉大学教育学部教授。幼児教育の質の向上につながる実践的課題を研究テーマとする。具体的には、子ども同士の相互作用、保育者の実践知、発達のリスク予防・低減のための取組等に関して、観察やインタビュー等による質的研究を中心に行う。

日本保育学会保育学文献賞を受賞して

保育学文献賞を受賞して

谷島　直樹

私は日本の保育園で７年間、その後ニュージーランドで８年間、保育園、幼稚園、小学校に勤め沢山のことを学びました。特にニュージーランドは「保育が落ち着かないのは子どものせいでなく大人が設定した環境やルーティーンに問題がないか考える」「保育者の役割はファシリテーターでありメンターである」「保育者のウェルビーイングは、子ども、保護者と相互に関わっている」「欠乏モデルと信頼モデル」等、数えきれないほどの、人が幸せに生きていく為のヒントを学んだ場所です。今回受賞させて頂いた本を書くにあたって、私は日本とニュージーランドという二つの国で保育を体験したことや気持ちの変化を、比較や優劣で結論付けるのではなくそのまま伝えたいと考えました。成り立ちも文化も抱える課題も違う両国ですが、子どもたちの素直さや輝きは同じです。その子どもたちが育っていく未来を見据えて今できることは何か？現状の日本の保育は何が強みでどこを早急に変えるべきなのか？日本はどんな社会、歴史、文化があり、何を子どもたちに継承していけるのか？等、ニュージーランドという一つの他国を通して読者の方が各々考えるきっかけになればと思いました。

私は、保育は子ども、保護者、保育者、そしてその地域や社会の人々が、お互いを大切にして作っていくことを理想に掲げるテ・ファーリキを落とし込んだ記録、ラーニングストーリーの理念を日本の文脈に合わせた形で取り入れていく事にも情熱を持っています。私たち大人が信頼でつながろうとする姿を見て感じて育った子どもたちが、次の世代にその価値観を渡していく。日本の保育現場でこのようなポジティブなサイクルを作るための一助になれたらこんな幸せな事はないと思いながら日々励んでいます。

今回の受賞により、私の研究や実践はまだまだ日本の保育に貢献できるという自信を与えて頂きました。本当に名誉ある賞を頂き、大変光栄に思います。

● *Profile*

谷島　直樹（やじま　なおき）
聖徳大学大学院児童学修士。2014 年９月にニュージーランドへ渡航。保育園、幼稚園、小学校でクラス担任を経験し 2023 年４月より札幌にある幼保連携型認定こども園おかだまのもり園長に就任。保育者のウェルビーイング、子どもの成長を保護者や子ども本人と共有するラーニングストーリーの導入に力を入れている。

リレー討論　地域に根ざした保育―令和時代の保育学―Ⅱ
少子化時代における施設運営の展望

髙木　早智子

はじめに

少子化が予想を超えたスピードで進む今、就学前の教育・保育施設も大きな転換期の渦中にある。施設運営を担う者にとっても、この先の時代を見据えたビジョンが必要となっているように感じる。今回、施設運営を担う者の１人として、リレー討論Ⅰで磯部氏が「地域づくりの拠点」という論点で述べられていたのを受け、自園での取り組みと、今後の展望について述べてみたい。

「地域に根ざす」ための取り組み

就学前の教育・保育施設の運営するにあたり、心掛けていることがある。子育てとは、子どもの保護者が主役であり、我々保育者は保護者の子育ての伴走者である、という軸を一本立てておくこと、である。保護者の子育てに寄り添い、時には励まし、ともに喜び、保護者が子どもを育てる喜びを実感できるような場所であることが肝要であると考えている。以下、自園での取り組みを紹介したい。

①入所児の保護者対象

まず入所児の保護者を対象に、「一日保育士体験」を実施。保護者に、年に１回１日園で過ごしてもらうことで、様々な効果がある[*1]。そして、年長児保護者に対しての親同士のつながりを作る「親友～OYATOMO」プロジェクト。保護者を地域ごとのチームに分け、運動会の種目で競い合い、レクリエーションで親睦を深めるなど、小学校入学前に保護者同士のつながりを作ることで、入学後の不安を軽減。「OYATOMO のありがたさは小学校に入ったらわかる」と上の子どもの時に体験した母親の言葉が象徴的である。そして、父親同士のつながりを作る「パ

パサポーター」。有志参加ではあるが、運動会の設営や運営の手伝いから、園庭の造成やちょっとした修繕、資源回収をして卒園式で卒園児に金メダルを贈るなど、園を通して、利害関係のない父親同士の交流が深まる。

②未就園児の子育て家庭対象

地域の子育て家庭に対しては、子育て支援センターで年２クール（週１回、６回連続講座、託児付き）、カナダ生まれの親応援プログラム「Nobody's Perfect ～完璧な親なんていない！」を実施[*2]。子育てや自分の悩みを気軽に相談できる仲間づくりに貢献している。また出産・育児で働くことを中断している保護者に対して、キャリアコンサルタントによる託児付きキャリア相談も支援センター内で開始した。

③地域との共生

地域においても、地元の自治会に加入。災害時や緊急時の相互扶助について自治会及び近隣福祉施設とも協定を結ぶ。また日々の園外活動などで挨拶しあうことで、地域の方へ施設の存在を知ってもらい、親しみをもっていただけるよう心掛けている。

そういった取り組みを45年以上続けてきた結果、親子三代が当園の卒園児という家庭も珍しくない。

少子化が進む今後における展望

コロナ禍に突入した2020年から、当施設においても年齢によっては、定員に満たない状況が散見され始めた。

少子化の波がすぐそこにまで迫っていることを肌で感じられるようになったのである。2022年の日本の出生数は80万人を割り込み、前年から４万3169人減。「地域に根ざす」、その「地域」に子どもが急激にいなくなってきたのである。そのような状況下で我々ができることは何であろうか？ここで考えてみたい。

①地域に存続し続ける意義とは

子どもがいなくなる地域に「根ざす」意味は何か。一つは、就学前の教育・保育施設として「そこにあり続ける」ことである。少子化がこのまま進んだとして、入所児童数がゼロになる日まで、必要とされる施設であることは確かである。その時まで、質の高い就学前の教育・保育を提供し続けることが最も重要な意味だと思う。

②新規プロジェクトの創生～保育者の主体性を礎に

もう一つは、今の施設の機能を生かして、地域に「根ざす」プロジェクトを生み出していくことである。入所児童の減少は、保育者の雇用に直結する。2023年の年頭に岸田首相が示した「異次元の少子化対策」の中にも、「保育サービスの拡充」が柱として示され、保育士の配置基準を75年ぶりに見直すこと、さらに保護者の就労に関わらず、子どもを時間単位で園に預けることができるという、保育園の利用要件の緩和も掲げられている。保育者の雇用という観点で見れば、これは朗報なのかもしれない。配置が手厚くなり、不定期とはいえ利用児童が増えることは、保育者の雇用の創出につながるのかもしれない。が、その効果は微々たるものである。少子化が加速度的に進めば、現場の保育者が保育者としての職を失う可能性は大きいだろう。

そのような先行き不透明な中、保育者の雇用を守りつつ、施設の存続を望むのであるなら、「就学前の教育・保育」以外の機能も備えておくべきだと考える。では、どのような機能がいいのか、その答えを私は持っていない。しかし、すでに一人のリーダーが組織を引っ張っていくことで存続させ続けることは困難な時代だと思う。この組織で働く保育者たちの中から、主体的にアイデアが生まれるのではないか。そんな期待とともに、令和３年度からリーダー手当に「自分の興味のある分野」で「仕事に生かせそうだと思う」資格（公的資格のほか、民間団体の資格も可）取得を紐づけた。その結果、こちらの期待以上の多彩な資格が並んだ。[*3] もしかすると、これらの中から地域に「根ざす」プロジェクトが生まれるのではないかと、今から楽しみにしている。

最後に

「地域に根ざす保育」とは、「そこにあり続ける」ことなのだろうと考える。その姿かたちを時代の流れや、状況に合わせてしなやかに変えながら、また変えてはならないものも大切に守りながら、地域にとってなくてはならない存在となる。それが少子化時代を迎える教育・保育施設の役目ではないだろうか。

今後の討論の中から新規プロジェクトのヒントがもらえるのではないかとご期待申し上げつつ筆を置きたい。

*1『一日保育士体験のすすめ』（親心を育む会著　大修館書店　2012年）
*2 https://www.nobodys-perfect-japan.com/
*3 https://www.hanazono-fukushikai.com/ 「学び一覧」

● *Profile*

髙木　早智子（たかぎ　さちこ）
花園第二こども園　園長
「親心を育む会」事務局。「親心を育む」ために園ができることは何かをテーマに啓発活動に取り組む。保育学会にて過去７回ポスター発表。またキャリアコンサルタント（国家資格）として、自法人にセルフ・キャリアドックを導入。保育者等のキャリア形成の支援に取り組む。

海外リポート

海外保育実習―ノルウェーの取り組み

中田　麗子（信州大学大学院教育学研究科研究員、ウプサラ大学客員研究員、オスロメトロポリタン大学客員研究員）

ノルウェー南東大学は、イタリア、ドイツ、デンマークの大学と協力関係を結び、幼稚園教員養成課程の学生を互いの国で実習させる取り組みを行っている。ノルウェーの幼稚園（barnehage）は幼保一元化された就学前施設で、大学３年間の課程で教員資格が得られる。同大学の制度では、保育実習の一部を海外の園で行うことができる。

海外保育実習で学生はどのような体験をするのだろうか。ある学生は、「言葉がわからないことがどういうことか、初めてわかった」と話し、移民の子どもたちに思いを馳せたという。また、身振り手振りで子どもたちとコミュニケーションをとった話や、動物の絵本を見ながらお互いの言葉で鳴き声を表現して楽しんだエピソードを語った学生もいた。

自分が当たり前だと思っていた保育の”ノルウェー的な”面に気づいた学生もいた。北イタリアで実習をした学生は、母親が恋しくていつまでも泣いている２歳児に対して、ハグしたりなぐさめたりしていたという。ところが、しばらくして、現地の先生が「もう泣くのをやめなさい！」と強く言い、男の子はそれで泣き止んだという。学生はこの先生の関わり方に驚き、「子どもを助けること」や「子どもに最善のこと」の意味が違うことを学んだと話した。

ノルウェー政府は、高等教育の質向上の一環として、すべてのプログラムで留学や海外実習を導入することを目指している。ノルウェー南東大学の海外保育実習も、国から300万クローナ（約４千万円）の補助金を受けたプロジェクトだ。

ある研究は、グローバル化する社会の中で、今やノルウェーの保育文化をよりオープンに議論すべき時であり、留学や海外実習はそのことに貢献しうると指摘する（Isaksen & Olsen, 2023）。異国の保育現場の経験は、個々の学生の気づきや成長のみならず、いずれは保育文化の省察と実践の深化につながるだろう。

私の文献リストから

このコーナーは、保育実践の発展のために会員諸氏が読まれている参考文献の紹介を目的とします。

森　眞理（神戸親和大学　教授）

【文献リスト】

1. グレゴリー・ベイトソン著　佐藤良明訳（2022）精神と自然　生きた世界の認識論　岩波文庫
2. Cagliari, P., Castagnetti, M., Giudici, C., Rinaldi, C., Vecchi, V., and Moss, P.（eds.）（2016）Loris Malaguzzi and the Schools of Reggio Emilia: A selection of his writings and speeches, 1945-1993 Routledge（『ローリス・マラグッツィとレッジョ・エミリアの学校：彼の著作と講演集、1945-1993』）
3. ジョン・デューイ著　市村尚久訳（1998）学校と社会・子どもとカリキュラム　講談社学術文庫
4. ジャンニ・ロダーリ著　窪田富男（訳）（1991）ファンタジーの文法　物語創作法入門 ちくま文庫
5. 佐伯胖（2015）幼児教育へのいざない　増補改訂版 円熟した保育者になるために　東京大学出版会
6. 須賀敦子（1998）トリエステの坂道　新潮文庫
7. 新日本聖書刊行会（翻訳）聖書（新改訳）（2017）いのちのことば社
8. 津守真（1987）子どもの世界をどうみるか　行為とその意味　NHK ブックス
9. 津守真（1997）保育者の地平　私的体験から普遍に向けて　ミネルヴァ書房
10. Vecchi, V.（2010）Art and Creativity in Reggio Emilia: Exploring the Role of and Potentials of Ateliers in Early Childhood Education. Routledge（『レッジョ・エミリアにおけるアートと創造性：幼児教育におけるアトリエの役割と潜在性の探究』北大路書房（2023 出版予定））

（アルファベット順）

【研究内容】

米国で生まれ育ち、帰国して入園した幼稚園の和式トイレを前に立ち竦んでいたＥちゃん。「ぼくはなにじん？」と尋ねてきたニューヨーク補修校幼児部で出会ったＨちゃん。私の研究は、保育者として子どもとの生活における子どもからの問いに始まり、大学という高等教育機関に身を置く今も、問いを続ける旅であると言っても過言ではない、と思っています。「子どもはどのように世界を知るのだろうか？」「子どもは世界をどのようにみているのだろうか？」「子どもの認識や表現に文化や環境はどのように影響しているのだろうか？」こうしたことを解き明かしたい、少しでも子どもの視座に近づくことが子どもと共に生きる者としての責務であり使命であると、研究に従事しています。この道のりの中で、多文化教育学の研究から歩き始め、米国の大学院に籍を置いていた30数年前にイタリアのレッジョ・エミリア市の乳幼児教育思想と実践に出会い、子どもとアート思考の関係性、ドキュメンテーションの意味と実践、乳幼児教育実践における子どもの権利の保障が研究の中心となっています。

「子どもは100の言葉を持っている」「子どもの権利・教師の権利・親の権利の保障」「美の権利と審美性」「参加・対話・連帯」等々、レッジョ・エミリアの乳幼児教育に学べば学ぶほど、子どもとは？人間とは？社会とは？世界とは？とその問いは拡がるばかりです。「出会うこと、交わること、現在を形成すること、省察すること」（p. 4., 文献リスト9）と津守真先生が記していらしたことを心に抱いて、子どもたち、学生、現場の方たち、国内外の研究者と研鑽を重ねていきたいと思う日々です。

新刊図書の紹介

このコーナーは、会員諸氏が読まれた多様なジャンルの図書を保育学の視点から紹介していただき、保育研究と保育実践の発展のための一資料を提供することを目的とします。

『砂・砂・砂　SAND：「砂の遊びとアート」と保育』

笠間浩幸 著
ホシツムグ　2022年7月

砂場と砂遊びの研究を長く続けている著者による新刊。まず瞠目させられたのは「砂場の風景を変える：遊びが広がる砂の技」という章だ。いくつかの道具と工夫によって、砂場での造形が大きく発展することが具体的に紹介されている。従来の砂場遊びのイメージを覆す魅力的なカラー写真も満載だ。

砂場での遊びの発達過程や砂遊びを通した育ちの多様性についても、わかりやすく整理されている。これらを押さえておくことで、より発達に即した保育の援助を考えられるようになるだろう。砂場での保育者の多様な役割についても簡潔に整理されており、参考になる。

他にも「本物の砂」や砂場の周囲も含めた環境整備の重要性、地域の公園の砂場の問題、原発事故後の福島の砂場に関する活動など、気付かされる点や考えさせられる点が多かった。砂場を侮るなかれ。

松阪　崇久（関西学院大学）

『〈子ども〉というコスモロジー：ポストモダン日本における問題圏』

吉田直哉 著
ふくろう出版　2023年4月

本書は、8人の論者による子ども論を、教育人間学をルーツとする著者が「子どものコスモロジー」という文脈のもとで論じたものである。

本書で取り上げられた論者の共通点として、近代への懐疑が挙げられる。中には、近代教育を代表する論者も含まれるが、近代という価値を徹底する中で、図らずもその限界から懐疑へと至ったと言えよう。各論者は近代への懐疑を「子ども」という存在へと投影し、それぞれのコスモロジーが展開され、ポストモダンの問題圏の中で新たな価値観の創出が試みられたのである。

ここ30～40年の間にポストモダンの視点から多くの論が蓄積されてきたが、それらの特徴として、理論的精密さに比して、現実に着地した際の陳腐さという難点があった。それ故、そうした論が新自由主義的政策に絡めとられていったと言えよう。他方で、この8人の論は、こうした陳腐さとは無縁な強靭さを有しており、今後も継承する価値を有しているだろう。

久保田　健一郎（大阪国際大学短期大学部）

学　会　記　事

■ 2022 年度事業報告

2021 年 9 月 11 日開催の理事会において「日本保育学会のビジョンにもとづくアクションプラン」が提示されました。そこでは、定款を踏まえたビジョンとして「新たな時代変化に応じた日本保育学会の持続可能な体制の検討と研究のさらなる活性化：子どもたちのすこやかな発達と幸福のために　Diversity と Inclusion を見据えて」が示され、アクションプランとして「1　学会の持続可能な発展をみすえて喫緊に検討すべき課題の検討」「2　デジタル化社会にむけて　ネット環境を有効活用した事業運営」「3　国際化や学際研究の活性化にむけて」「4　スケールメリットとオンラインをいかした若手会員の積極的関与とネットワーク化」が示されています。2022 年度の事業について、アクションプランに基づく全体的な報告と個別の報告をさせていただきます。

1　学会の持続可能な発展をみすえて喫緊に検討すべき課題の検討について

昨年度の定款変更に続き、委員会規程の整備に着手しました。また、時代にあった倫理ガイドブックの改訂作業を行いました。なお、コロナウィルス感染症の蔓延にともなう緊急対応として、会長任期は 1 期目 1 年、2 期目 2 年とされました(評議員の任期は従来通り)。

2　デジタル化社会にむけて　ネット環境を有効活用した事業運営について

委員会のオンライン開催、地区ブロックシンポジウム等をオンラインにて開催いたしました。第 75 回（聖徳大学）では、74 回大会に続き、事前のオンディマンドと当日のオンラインによる議論をミックスする形式の活用などで、現地開催に近い形で実施しました。『保育学研究』の電子投稿も PDCA サイクルにより、形式不備による「不受理」が少なくなるよう改善しました。また、会報につきましても電子による配信を開始しました。

3　国際化や学際研究の活性化にむけてについて

韓国嬰幼児保育学会との学術交流・調印式および韓国幼児教育学会との学術交流・オンライン調印を行いました。また、主要国際保育系学会への若手会員派遣を行いました。

4　スケールメリットとオンラインをいかした若手会員の積極的関与とネットワーク化について

ブロック研修では、昨年度の中国・四国ブロックでも地域の保育者も交えてのオンラインで開催に続き、東北・北海道ブロックでは複数のカメラを使用したリモート公開保育を開催するなど新しい動きもありました。

1．第 75 回大会の開催

(1) 大会テーマ：「アーリー・スタート　～非認知能力研究の知見を保育に活かす～」
期日：2022 年 5 月 14 日（土）、15 日（日）
会場：聖徳大学（オンライン開催）
大会実行委員長：阿部真美子
口頭発表：180 件、ポスター発表：508 件、自主シンポジウム：53 件
大会研究発表総数：688 件

(2) 主たる企画

・大会基調講演：「アタッチメントが拓く子どもの未来:「非認知」なる心の発達と保育者の役割」
遠藤　利彦（東京大学大学院教育学研究科教授）

・大会実行委員会企画シンポジウム：
「アートパークの実践から　～子どもの表現・保育者養成・地域連携～」
大成　哲雄（聖徳大学）
北沢　昌代（聖徳大学短期大学部）
石川　康代（ケヤキッズ保育園）
佐藤　牧子（目白大学）
能登谷小町（聖徳大学美術研究室）
「わが国の医療保育の現状とこれからの方向性」
佐藤　里美（医療法人社団健育会　さとう小児科医院　病児保育室バンビーノ室長）
石井　光子（千葉県千葉リハビリテーションセンター　愛育園　園長）
來住るみ子（社会福祉法人豊福祉会　みつわ台保育園　主任保育士）
「ドキュメンテーションが拓く探究的な学びの世界―イギリスとスウェーデンの実践から―」
ルイーズ・ローイング氏（イギリス メイドリー保育学校校）
グニラ・ダールベリ氏（スウェーデン ストックホルム大学名誉教授）

・国際交流委員会・第 75 回大会実行委員会・OMEP 日本委員会共催シンポジウム
「ゼロ歳からの子どもの権利条約―ウェルビーングに向けてー」
メルセデス・マイヨール・ラサール
（ブエノスアイレス大学教授／ OMEP 世界総裁）

・学会企画シンポジウム：
編集常任委員会
「実践研究へのいざないⅣ―質的研究法を問い直す―」
課題委員会
「コロナ下における保育と子どもの育ちを考えるⅠ―予備調査から明らかになったこと―」

2．第 76 回大会準備
期日：2023 年 5 月 13 日（土）14 日（日）
会場：オンライン開催
大会実行委員長：熊本学園大学　伊藤良高

3．第 77 回大会準備
期日：2024 年 5 月 11 日（土）12 日（日）予定

会場：オンライン開催
大会実行委員長：神戸大学　北野幸子

4．学会誌『保育学研究』の発行
（1）第60巻第1号、第2号・第3号の発行（第3号特集テーマ：保育の質の向上及び子育て支援の充実に向けた取り組み－地域レベルの試みに焦点を当てて－）
（2）第61巻の投稿受付と発行準備（第3号特集テーマ：持続可能な社会と保育―SDGs時代の保育を考える―）
（3）第62巻の募集と発行準備（第3号特集テーマ：多様なニーズと保育）

5．社員総会、評議員会、理事会の開催
（1）社員総会及び理事・評議員会、地区ブロック評議員会（オンライン）の開催
（2）理事会（4月23日、9月10日、2月11日）の開催

6．各種委員会の開催
開催した委員会：編集常任委員会　国際交流委員会　課題研究委員会　広報委員会　保育政策検討委員会　組織検討委員会　大会検討委員会　倫理ガイドブック改訂委員会　研究奨励賞推薦委員会及び同選考委員会　保育学文献賞推薦委員会及び同選考委員会

7．『日本保育学会会報』の発行
第183号、184号、185号の発行
2022年9月184号より会報デジタル化実施
学会ホームページリニューアルに向けてワーキンググループ立ち上げ

8．日本保育学会研究奨励賞（大会発表・論文部門）の授与
大会発表部門
第66回受賞（第74回大会）
廣部　朋美、松原　乃理子「我が子にHSC傾向を感じる母親の就園選択プロセス（2）―2年保育検討期間」
綿貫　文野「子どもの成長を共に喜びあえる連絡帳の活用－自己主張を特徴とする2歳児を養育する保護者をエンパワーメントする視点から－」
篠原　直子「特別な支援を要する幼児が複数在籍する学級の運営に関する保育者の実践と振り返り（2）―保育実践と保育者の語りの関連から」
論文部門
第66回受賞（保育学研究　第59巻第1号）
石井　美和「子育て支援実践の形成・変容のプロセスを通した保育者アイデンティティの再構築―制度ロジック概念を手がかりとして―」

9．日本保育学会保育学文献賞の授与
該当なし

11．委員会シンポジウム・研究集会開催の助成
保育政策検討委員会
「保育の質の確保と向上のために－「構造の質」を問うためのはじめの一歩－」
2023年2月12日　於：オンライン（Zoom）
北海道・東北地区ブロック
「With コロナ時代の公開保育研究会のあり方を探る」
2022年10月13日　於：認定こども園ひかり　および　オンライン（Zoom）

12．課題研究委員会：Report2022の発行
『コロナ下における保育と子どもの育ちを考えるⅠ―予備調査から明らかになったこと―』（ＨＰ掲載）

13．倫理ガイドブック改訂版の準備
倫理ガイドブック改訂委員会
『保育学研究倫理ガイドブック 2023　－子どもの幸せを願うすべての保育者と研究者のために－』

14．国際交流
（1）韓国嬰幼児保育学会との学術交流・調印式（2022年9月27日）および 韓国幼児教育学会との学術交流・オンライン調印（2022年11月26日）
（2）主要国際保育系学会への若手会員派遣および募集
ワークショップ：「オンライン学会での発表　ポストコロナを見据えたオンラインを介した研究交流のために」
2022年12月10日 於：オンライン（Zoom）
（3）国際保育資料データベースの収集

■ 2023年度 事業計画

2021年9月の理事会で示されたビジョン「新たな時代変化に応じた日本保育学会の持続可能な体制の検討と研究のさらなる活性化：子どもたちのすこやかな発達と幸福のために　DiversityとInclusionを見据えて」と4つのアクションプランに基づき運営していく予定です。これは、以下の内容となっています（一部は2022年度に実施済み）。

（前提）定款にもとづく活動
（目的）2目的
第2条 当法人は、保育の研究を通して会員相互の交流と連携を図り、子どもたちの健やかな発達と幸福をめざし、保育界の進歩及び会員に共通する利益の向上に貢献することを目的とする。
（事業）9事業
第3条 当法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。
1．研究の促進及び公開
2．共同の調査・研究及びその成果の公開
3．研究会及び年次大会の開催
4．研修会、講習会及び講演会の開催
5．学会誌「保育学研究」その他学術的刊行物の発行
6．会員の褒賞
7．会報の発行、会員相互の交流及び情報交換
8．内外の諸団体との交流、連携及び情報交換
9．その他当法人の目的を達成するために必要な事業

Ⅰ　定款を踏まえたビジョン

新たな時代変化に応じた日本保育学会の持続可能な体制の検討と研究のさらなる活性化

：子どもたちのすこやかな発達と幸福のためにDiversity と Inclusion を見据えて

Ⅱ　アクションプラン

1　学会の持続可能な発展をみすえて喫緊に検討すべき課題の検討

・9事業を実施していく財政の安定化　（短期･中長期）

・働きやすい事務局体制による会員サービスと事業運営の安定化（短期）

・デジタル化への対応とそれによる研究の一層の活性化（詳しくは2と3）（短期中長期）

・デジタル化の中での研究倫理等の会員への周知の徹底（倫理ガイドブック改訂版の刊行）（短期）

・教育界や会員への保育政策や保育研究の最新動向の提供（短期）

・上記に伴い定款や諸規則の見直し改訂（短期）

2　デジタル化社会にむけて　ネット環境を有効活用した事業運営

1)委員会のオンライン開催による経費削減（対面開催とのバランスの検討、来年9月までは理事会はすべてオンライン開催）（短期）

2)地区ブロックシンポや各種委員会に基づく研究会等のオンライン開催（短期）

上記については非会員向け費用徴収の検討（財源　収益化、保育政策・国際・課題研究　短期）

3)大会（オンライン）開催の業者委託等の継続性による効率化の検討　（短期）

4)会報のデジタル化と HP 等の一層の有効活用による会員相互交流（短期）

5)保育学研究の電子ジャーナル化の検討（刊行70年を経て5年後を見据えて　中長期）

6)保育学会刊行物や保育界の史料の電子アーカイブ化（中長期）

3　国際化や学際研究の活性化にむけて

1)OMEP 日本委員会、韓国両学会との研究協力の在り方の見直しと発展（短期）、若手海外派遣奨励の継続とあわせて、東アジアをはじめ会員の海外との研究交流機会のオンライン等による提供（中長期）

2)関連学会や関係団体との研究交流（オンラインでの研究会等の案内や開催等　短期・中長期）

4　スケールメリットとオンラインをいかした若手会員の積極的関与とネットワーク化

理事、評議員以外の方々の委員会への参加、研究会等への関与（企画、運営、実施等）

1．第76回大会の開催

(1) 大会テーマ：「保育を創る、未来を拓く　～保育学の創造をめざして～」

期日：2023年5月13日（土）14日（日）

会場：オンライン開催

大会実行委員長：熊本学園大学　伊藤良高

(2) 主たる企画

・大会基調講演「なぜ産んだ我が子を殺し捨てるのか？」蓮田健（慈恵病院　理事長兼院長）

・大会実行委員会企画「時代の保育とソーシャルワークを展望する

－保護者、子ども、保育者が輝く保育を目指して－」

「教育学とのつながりから創造する保育学の未来『子ども Agency』という概念を通して」

「保育の多様性をめぐって－園における外国籍幼児の保護者支援の在り方－」

「保育学・日本保育学会のこれまでとこれから」

・国際シンポジウム　「保育理念としての子どもと遊び

－韓国と日本における保育学の研究を根拠とした実践の創造－」

金　慶喆（김경철：Kim Kyung-chul）（韓国教員大学校）

嚴　正愛（엄정애：Ohm Jung-ae）（梨花女子大学校）

河﨑　道夫（高田短期大学育児文化研究センター研究員・三重大学名誉教授）

・九州の保育実践：「自然災害と保育～被災から復興、保育所に求められるもの～」

・学会企画シンポジウム2件：

編集常任委員会「実践研究へのいざないⅤ－実践研究における“問い”の立て方について考える－」

課題研究委員会「コロナ下における保育と子どもの育ちを考えるⅡ－我々はコロナから何を学ぶのか？－」

・ランチタイムセッション：

倫理ガイドブック改訂委員会「保育学研究倫理ガイドブック 2023 －子どもの幸せを願うすべての保育者と研究者のために－」

2．第77回大会準備

大会テーマ:「保育における Co-Agency を考える」

期日：2024年5月11日（土）12日（日）予定

会場：オンライン開催

大会基調講演：山縣文治氏（関西大学人間健康学部人間健康学科　教授）

大会実行委員長：神戸大学　北野幸子

3．第78回大会準備（中部ブロック）

大会テーマ：未定

期日：2025年5月10日（土）11日（日）予定

会場：長野県立大学

大会実行委員長：長野県立大学　太田光洋

4．学会誌『保育学研究』の発行

(1) 第61巻第1号・第2号・第3号の発行

（第3号特集テーマ：持続可能な社会と保育―SDGs 時代の保育を考える―）

（2）第 62 巻の投稿受付と発行準備
（第 3 号特集テーマ：多様なニーズと保育）
（3）第 63 巻の募集と発行準備
（第 3 号特集テーマ：幼児教育（幼稚園・保育所・こども園の全てを含む）から小学校教育への接続について）

5．社員総会、評議員会、理事会の開催
（1）社員総会及び理事・評議員会、地区ブロック評議員会の開催
（2）理事会（4 月 15 日、9 月 17 日、2 月 24 日）の開催

6．名誉会員の認定

7．各種委員会の開催
開催予定の委員会：編集常任委員会　国際交流委員会　課題研究委員会　広報委員会　保育政策検討委員会　組織検討委員会　大会検討委員会　倫理ガイドブック改訂委員会　研究奨励賞推薦委員会及び同選考委員会　保育学文献賞推薦委員会及び同選考委員会　名簿作成委員会　選挙管理委員会

8．『日本保育学会会報』の発行
（1）第 186 号、187 号、188 号の発行

9．日本保育学会研究奨励賞（発表・論文部門）の授与
大会発表部門
第 67 回受賞（第 75 回大会）
小島好美「幼稚園の中堅期以降に認識された困難とキャリア発達支援を支えた要因についての検討
―TEM から捉えたキャリア発達プロセスに着目して―」
論文部門
第 67 回受賞（保育学研究 第 60 巻第 1 号）
入江慶太「小児病棟における認定資格を有していない保育士の専門性の検討」
第 67 回受賞（保育学研究 第 60 巻第 1 号）
加藤孝士「放射能災害下の保育を経験した保育者の意識
―保育者としてのやりがいと困難に注目した量的・質的視点からのアプローチ―」

10. 日本保育学会保育学文献賞の授与
第 59 回受賞
『「おんなじ」が生み出す子どもの世界　―幼児の同型的行動の機能―』砂上史子　東洋館出版社
『ニュージーランドの保育園で働いてみた
子ども主体・多文化共生・保育者のウェルビーイング体験記 』谷島直樹　ひとなる書房

11. 委員会シンポジウム・研究集会等開催の助成
保育政策検討委員会：2023 年度中開催予定
地区ブロック研究集会：4 地区ブロック実施予定
中部地区ブロック「戦争と保育、そして子どもたち」2023 年 3 月 21 日　於オンライン（Zoom）
国際交流委員会：若手派遣ワークショップ

12. 倫理ガイドブック改訂版の発行
倫理ガイドブック改訂委員会
『保育学研究倫理ガイドブック 2023　－子どもの幸せを願うすべての保育者と研究者のために－』
（2023 年 5 月 13 日発行）
※全会員への配付および新入会員へ随時配付。
第 76 回大会のランチタイムセッションにて紹介動画を配信。

13. 国際交流
（1）国際シンポジウムの開催
（2）韓国嬰幼児保育学会との学術交流 および 韓国幼児教育学会との学術交流・国際大会参加
（3）主要国際保育系学会への若手会員派遣の募集
（4）国際保育資料データベースの収集

14. その他
（1）2024 年 1 月評議員選挙実施
（2）一般社団法人 日本保育学会ホームページの全面リニューアル
（3）各委員会規程の統一
（4）82 回大会以降の対面・オンライン開催のサイクル検討
（81 回大会までは対面・オンライン開催の相互実施が決定）

■ 2022 年度 会計報告

貸借対照表

令和5年2月28日（単位：円）

科　　目	当 年 度	前 年 度	増　減
Ⅰ　資産の部			
1．流動資産			
現金預金	63,551,971	49,565,179	13,986,792
貯蔵品	529,999	602,221	△ 72,222
前渡金	1,518,797	1,613,824	△ 95,027
未収入金	2,750		2,750
流動資産合計	65,603,517	51,781,224	13,822,293
2．固定資産			
（1）基本財産			
その他基本財産	34,055,754	34,056,549	△ 795
基本財産合計	34,055,754	34,056,549	△ 795
（2）特定資産			
その他積立資産	12,432,898	12,433,126	△ 228
特定資産合計	12,432,898	12,433,126	△ 228
（3）その他固定資産			
什器備品	2,684	38,486	△ 35,802
敷金	1,113,200	1,113,200	0
長期前払費用	137,500	27,501	109,999
その他固定資産合計	1,253,384	1,179,187	74,197
固定資産合計	47,742,036	47,668,862	73,174
資産合計	113,345,553	99,450,086	13,895,467
Ⅱ　負債の部			
1．流動負債			
未払金		12,621	△ 12,621
未払費用	3,707,032		3,707,032
前受金	16,220,000	16,832,755	△ 612,755
未払法人税等	70,000	64,100	5,900
未払消費税等		215,800	△ 215,800
預り金	97,323	135,196	△ 37,873
流動負債合計	20,094,355	17,260,472	2,833,883
負債合計	20,094,355	17,260,472	2,833,883
Ⅲ　正味財産の部			
一般正味財産	93,251,198	82,189,614	11,061,584
（うち基本財産への充当額）	(34,055,754)	(34,056,549)	△ 795)
（うち特定資産への充当額）	(12,432,898)	(12,433,126)	△ 228)
正味財産合計	93,251,198	82,189,614	11,061,584
負債及び正味財産合計	113,345,553	99,450,086	13,895,467

正味財産増減計算書

令和4年3月1日から令和5年2月28日まで（単位：円）

科　　目	当 年 度	前 年 度	増　減
Ⅰ　一般正味財産増減の部			
1．経常増減の部			
（1）経常収益			
①基本財産運用益			
基本財産受取利息	85	1,673	△ 1,588
②特定資産運用益			
特定資産受取利息	212	124	88
③受取入会金			
受取入会金	102,000	433,000	△ 331,000
④受取会費			
受取会費	41,883,200	41,734,030	149,170
⑤事業収益			
学会誌売上高	1,198,520	1,223,300	△ 24,780
刊行物売上高	13,500	16,700	△ 3,200
大会収益	25,584,000	20,890,000	4,694,000
研修会参加費	109,000		109,000
⑥雑収益			
受取利息	281	438	△ 157
雑収益	200,000	0	200,000
経常収益計	69,090,798	64,299,265	4,791,533
（2）経常費用			
①事業費			
臨時雇賃金	26,098	134,200	△ 108,102
会議費	135,222	59,847	75,375
旅費交通費	283,462	419,994	△ 136,532
通信運搬費	4,899,675	7,329,174	△ 2,429,499
消耗品費		35,820	△ 35,820
印刷製本費	8,534,064	8,228,436	305,628
賃借料	262,300	487,950	△ 225,650
諸謝金	330,379	410,350	△ 79,971
賞金・助成金・分担金	181,653	482,468	△ 300,815
委託費	14,895,087	14,928,000	△ 32,913
雑費	19,570	47	19,523
支払手数料	76,599	3,254	73,345
②管理費			
給与手当	14,671,315	12,135,016	2,536,299
法定福利費	2,234,840	2,047,163	187,677
福利厚生費	27,560	21,966	5,594
その他人件費	267,775	451,069	△ 183,294
接待交際費	24,907	5,400	19,507
会場費		8,282	△ 8,282
旅費交通費	173,547	310,974	△ 137,427
通信運搬費	1,709,800	1,783,035	△ 73,235
減価償却費	273,401	32,907	240,494
消耗什器備品費		52,811	△ 52,811
消耗品費	202,123	202,788	△ 665
印刷製本費		120,714	△ 120,714
水道光熱費	143,052	116,838	26,214
賃借料	3,520,199	3,232,467	287,732
保険料	10,000	10,000	0
顧問料	1,968,230	2,210,708	△ 242,478
租税公課	11,982	219,700	△ 207,718
雑費	7,600	79,200	△ 71,600
支払手数料	830,130	734,657	95,473
委託費	2,238,643	2,284,031	△ 45,388
慶弔費		30,569	△ 30,569
経常費用計	57,959,213	58,609,835	△ 650,622
当期経常増減額	11,131,585	5,689,430	5,442,155
2．経常外増減の部			
（1）経常外費用			
固定資産除却損	1		1
経常外費用計	1	0	1
当期経常外増減額	1	0	1
税引前当期一般正味財産増減額	11,131,584	5,689,430	5,442,154
法人税等	70,000	64,100	5,900
税引後当期一般正味財産増減額	11,061,584	5,625,330	5,436,254
一般正味財産期首残高	82,189,614	76,564,284	5,625,330
一般正味財産期末残高	93,251,198	82,189,614	11,061,584
Ⅱ　正味財産期末残高	93,251,198	82,189,614	11,061,584

1. 重要な会計方針

（1）棚卸資産の評価基準及び評価方法
個別法

（2）固定資産の減価償却の方法
有形固定資産
定率法を採用しています。なお、平成 10 年 4 月 1 日以降取得した建物（附属設備を除く。）及び平成 28 年 4 月 1 日以降取得した建物附属設備並びに構築物については、定額法を採用しています。

（3）その他計算書類の作成のための基本となる重要事項
①消費税等の会計処理
税込経理方式によっています。
②リース取引の処理方法
リース物件の所有権が借り主に移転すると認められるもの以外のファイナンス・リース取引については、通常の賃貸借取引にかかる方法に準じた会計処理を行っています。

2. 基本財産及び特定資産の増減額及びその残高

基本財産及び特定資産の増減額及びその残高は、次のとおりである。

（単位：円）

科　目	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
基本財産				
預貯金	34,056,549	85	880	34,055,754
小　計	34,056,549	85	880	34,055,754
特定資産				
研究奨励賞積立資産	6,981,332	119	440	6,981,011
保育学文献賞積立資産	5,451,794	93		5,451,887
小　計	12,433,126	212	440	12,432,898
合　計	46,489,675	297	1,320	46,488,652

3. 固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高

固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高は、次のとおりである。

（単位：円）

科　目	取得価額	減価償却累計額	当期末残高
什器備品	754,951	752,267	2,684
合　計	754,951	752,267	2,684

■ 2023 年度 予算

2023 年度　収支予算書

自3/1/2022　至2/28/2023

Ⅰ　経常増減の部　（単位：円）

1. 経常収益

	勘　定　科　目	2023 年度予算
1	基本財産運用益	1,000
2	特定資産運用益	200
3	受取入会金	200,000
4	受取会費	42,200,000
5	学会誌売上高	1,270,000
6	刊行物売上高	15,000
7	大会収益	25,860,000
8	受取寄付金	0
9	研修会参加費	630,000
10	雑収益	10,000
	経常収益計	69,556,200

2. 経常費用

（1）事業費

1	臨時雇賃金	565,000
2	福利厚生費	10,000
3	会議費	1,177,500
4	旅費交通費	1,685,000
5	通信運搬費	2,278,000
6-1	消耗什器備品費	0
6-2	消耗品費	140,000
7	印刷製本費	12,650,000
8	賃借料	411,400
9	諸謝金	954,092
10	賞品・助成金・分担	920,000
11	委託費	17,997,000
12	手数料	10,000
13	雑費	110,000
	事業費計	38,907,992

（2）管理費

1	給料手当	15,010,000
2	法定福利費	2,410,000
3	福利厚生費	60,000
4	その他人件費	350,000
5	接待交際費	40,000
6	会議費	20,000
7	旅費交通費	510,000
8	通信運搬費	1,260,000
9	減価償却費	0
10	消耗什器備品費	110,000
11	消耗品費	260,000
12	修繕費費	110,000
13	印刷製本費	160,000
14	水道光熱費	160,000
15	賃借料	3,610,000
16	保険料	30,000
17	顧問料	2,000,000
18	租税公課	60,000
19	雑費	40,000
20	振込手数料	970,000
21	委託費	3,230,000
22	慶弔費	60,000
	管理費計	30,460,000
	経常収益計	69,556,200
	経常費用計	69,367,992
	当期経常増減額	**188,208**

Ⅱ　経常外増減の部

当期経常外増減額	**0**
税引前当期一般正味財産増減額	188,208
法人税等	0
税引後当期一般正味財産増減額	188,208
一般正味財産期首残高	93,251,198
一般正味財産期末残高	93,439,406

各種委員会報告

■編集常任委員会

2022-8/8　12/18
2023-1/29　6/17

1．『保育学研究』について

第60巻第1号から第3号を発刊。特集のテーマは「保育の質の向上及び子育て支援の充実に向けた取り組み―地域レベルの試みに焦点を当てて―」、展望のテーマは「ポスト人間中心主義時代の保育を展望する―2050年へのリイマジネーション―」、保育フォーラムのテーマは「ウィズ（with）・コロナ時代の保育・幼児教育現場―子どもの育ちの視点から―」。

現在は62巻の投稿を受付中。投稿データファイルをWordに変更したことに伴い、応募要項の他に執筆要項の変更も行った。なお、委員会規程の変更に伴い、専門委員を15名程度に増員することとした。

2．編集常任委員会企画シンポジウムについて

第76回大会において、継続しているテーマのシンポジウム（「実践研究へのいざないⅤ―実践研究における“問い”の立て方について考える―」）を開催し、多くの会員がオンラインで参加した。

（文責：河邉　貴子）

■国際交流委員会

2022/10/1 ～ 2023/06/30

1．学会Webサイト「諸外国の幼児教育ガイドライン」に、フランスの幼児教育を掲載した。
2．第4回国際学会若手会員派遣ワークショップについて、2022年12月10日（土）オンラインで開催した。今回から有料（参加費1,000円）としたところ、参加者は10名程度に留まった。他方、参加者の満足度は高かった。
3．主要国際保育系学会等への若手会員派遣支援について、1期（2～5月）に1件の申請があり採択された。
4．日本保育学会第76回大会国際シンポジウムを国際交流委員会、OMEP日本委員会の共同で企画した。テーマは「保育理念としての子どもと遊び－韓国と日本における保育学の研究を根拠とした実践の創造－」で、話題提供は金慶喆氏（韓国教員大学校）、嚴正愛氏（梨花女子大学校）、河﨑道夫氏（高田短期大学育児文化研究センター）、指定討論は勅使千鶴氏（日本福祉名誉教授）であった。

（文責：中坪　史典）

■課題研究委員会

2022-4/8　5/20　8/19　10/8　10/22　12/3
2023-3/25

1．『コロナ下における保育と子どもの育ちを考えるⅠ-予備調査から明らかになったこと-』Report2022を発行した（ＨＰ掲載）。
2．日本保育学会第76回大会において、「コロナ下における保育と子どもの育ちを考えるⅡ―我々はコロナから何を学ぶのか？―」をテーマに企画シンポジウムを開催した。前年までの調査結果から、コロナ下での子どもの体験、保護者対応、地域との関わり等に焦点を当て提示し、最前線でご活躍の川上一恵氏（東京都医師会理事）、敷村一元氏（えひめこどもの城園長）を指定討論者に迎え、議論を深めた。さらに、今回の議論も踏まえ、「with感染症」時代を生きる子ども達と保育に資するための本調査の内容について提案した。趣旨説明は西山修（岡山大学）、話題提供は新井美保子（岡崎女子大学）、三宅茂夫（神戸女子大学）、花輪充（東京家政大学）であった。

（文責：佐々木　晃）

■広報委員会

広報委員会では、2022年8月から2023年7月までの間に、会報184～186号を発行しました。特に184号より電子媒体のみによる配信となりましたこと、大きな変化として報告させて頂きます。

184号では、第75回大会レポートとして、オンラインで開催された大会の報告がなされています。185号では、これからの保育者を育てるために、ということで、コロナ禍の中で苦慮した保育者養成について、それぞれの工夫と課題を報告頂きました。186号では、同じくコロナ禍において、各園で実践されている保育へのICTの活用についてご報告頂きました。

今後、広報委員会として、引き続き会報の発行とともに、本年度、学会ホームページのリニューアルも予定しております。引き続き宜しくお願いします。

（文責：上田　敏丈）

■日本保育学会研究奨励賞（大会発表部門）選考委員会

2022/9/24

第75回大会の研究発表のうち研究奨励賞推薦委員会において推薦された候補17件のうち、規程により対象となった研究発表は13件あった。各委員の評価をもとに委員全員により討議を進めた結果、K-D-3-158　○小島 好美 「幼稚園の中堅期以降に認識された困難とキャリア発達支援を支えた要因についての検討－TEMから捉えたキャリア発達プロセスに着目して－」を研究奨励賞（大会発表部門）授与候補として決定した。

（文責：戸田　雅美）

■日本保育学会研究奨励賞（論文部門）選考委員会

2023-1/13

2022年度に発刊された『保育学研究』第60巻第1号～第3号に所収されている論文のうち、規程に則って、その対象となるものは16編あった。これらをもとに当該委員会にて議論された。審議経過の結果、次の2論文を授賞候補とした。

・入江 慶太会員「小児病棟における認定資格を有していない保育士の専門性の検討」

・加藤 孝士会員「放射能災害下の保育を経験した保育者の意識―保育者としてのやりがいと困難に注目した量的・質的視点からのアプローチ―」

以上を研究奨励賞（論文部門）授与候補として理事会に推挙することとした。これら2論文の推薦理由については『保育学研究』をご高覧いただきたい。なお次点として、山中拓真会員「合議機関の人口統計的構成が市区町村の子ども・保育者比縮小施策に与える効果」があった。当該論文のテーマは、大変希少で、かつ重要な切り口からのもので、多くのデータ分析も厳格に実施されている。しかしながら課題にも示されているように、別の視点での考察もして頂きたいとのことから、今後のさらなる深化に期待したい。

（文責：西本　望）

■保育学文献賞選考委員会

2022-12/20

2023-1/25　1/30

委員会は規程に則って、推薦委員から推薦のあった11冊のうち選考対象となる条件を満たす7冊の文献について選考を行った。各委員が推薦したい文献およびその理由について述べ、独創性、議論のていねいさ、保育学への貢献性等の視点から検討を行った結果、以下の2点を授賞候補とすることが決定した。

①砂上史子『「おんなじ」が生み出す子どもの世界－幼児の同型的行動の機能』東洋館出版社

②谷島直樹『ニュージーランドの保育園で働いてみた：子ども主体・多文化共生・保育者のウェルビーイング体験記』ひとなる書房

（文責：汐見　稔幸）

■大会検討委員会

2022/7/17

委員会では、以下の内容を検討した。1. 第75回大会（千葉）実行委員会及び委託業者より提出された、大会報告および今後の課題について申し合わされた。2. 第76回大会（九州）開催校のWi-Fi環境管理を業者委託する可能性があることが提言され、検討を行うこととなった。3. 第77回大会（近畿）について、4. その他であった。また、今後の大会運営に関して、学会事務局・委託業者との連携体制や前回大会からの引継ぎ方法などについても議論された。

（文責：大方　美香）

■組織検討委員会

組織検討委員会では、主に1. 各種委員会の規程の文言の統一、2.OMEP日本委員会との関係に関する検討、3. 決算期の変更の3点を行った。

1．2022/7～8月にかけて、組織検討委員会において規程統一案を作成し、2022/9/10の理事会で2023/2/11の理事会に諮ることを決定し、2月理事会では広報委員会、編集常任委員会以外の委員会規程案が承認された。そして2023/4/15理事会で、編集常任委員会：専門委員の人数は「15名程度」とし、「専門委員の人数は必要に応じて検討する」と内規に記載すること、広報委員会は委員の人数を変更（6→7名）し、委員は、各地区の理事による推薦によって決めることが確定した。また新たに組織検討委員会規程も提案され審議・承認された。このことにより学会の現行規程全ての表現等の統一が図られた。

2．OMEP日本委員会担当の橋本事業担当理事の報告を受け、学会としての対応方針の検討を行った。

3．決算期の変更（3月→2月）に伴い、各委員会等は2月に予算請求、岡会計担当理事を中心に案を作成、4月理事会で予算案決定という予算案をより精査する仕組みを整えた。

（文責：秋田　喜代美）

■保育政策検討委員会

2022-8/21　10/9　11/2　11/22　12/16

2023-1/31　6/14

2022度は新たに保育の質の中でも「構造の質」に着目して検討を行った。委員会を全6回実施し、それ以外に公開シンポジウムを1回行った。以下、シンポジウムの概要である。

テーマ：「保育の質の確保と向上のために－『構造の質』を問うためのはじめの一歩－」

日時：2023年2月12日（日）13：30～15：30

会場：Zoomウェビナー

参加費：会員500円、非会員1000円

参加者：279名（申込者数348名）

内容としては、秋田会長に挨拶をいただいたあと、趣旨説明を行い、3部構成で行われた。

第1部は「保育士配置基準の実態から考える」という内容で、保育を考える親の会の顧問である普光院亜紀氏からお話をいただき、香曽我部委員と大豆生田により、進行および質疑応答を行った。

第2部は、「保育実践の場から保育の構造を考える」という内容で全国保育士会副会長の北野久美氏からお話をいただき、井上委員、神長委員により、進行と質疑応答を行った。

第3部は「地方版子ども・子育て会議への期待と課題」という内容で世田谷区役所の渡部健二郎氏よりお話をいただき、岡委員、清水委員により、進行と対談を行った。

2023年度も引き続き「構造の質」をテーマに検討を進めており、第4回公開シンポジウムの実施に向け、学会内外の方からのヒアリングも行っている。

（文責：大豆生田　啓友）

■倫理ガイドブック改訂委員会

2022-4/15　6/26　8/29　9/23　10/23　10/29　12/11

2023-1/22　5/10

2021年10月より本委員会では、投稿論文等が研究倫理に抵触することがないよう、若手研究者の育成に役立つことをめざし、『**保育学研究倫理ガイドブック2023－子どもの幸せを願うすべての保育者と研究者のために－**』を2023年5月13日に初版第1刷発行した。なお、この新倫理ガイドブックは全会員への配付（第76回大会プログラムに同封）および新入会員へ随時配付を行っている。第76回大会ではランチタイムセッション（オンデマンド配信）を開催した。また、学会より直接販売もしている。

（文責：大方　美香）

会報第188号原稿の募集

広報委員会では、以下の原稿を募集しています。ふるってお寄せください。

①海外リポート

研究や視察などで海外へ行かれた方や、海外在住の方は、海外の研究動向や保育に関わる情報を紹介してください。

②新刊図書の紹介

過去2年間に初版として出版された他者の図書で、興味深いもの、保育にとって有意義と思われるものを、感想を含めて紹介してください。ジャンルは問いません。

③私の文献リストから

研究や実践のために参照されている文献リストをご紹介ください。文献は、著書、論文など15冊（編）以内。内容の紹介は必要ありませんが、外国語の文献については、邦訳を付けてください。また、ご自身が、その文献を使って研究しようとしている（関心をもっている）分野についても、お書きください。

〔字　数〕 ① 800字以内（写真1葉は200字に換算）
② 400字以内
③ 800字以内

〔締め切り〕 2023年9月30日必着

〔送付先〕 Mail：hoiku.info@jsrecce.jp
作成いただくデータはWordファイルでお願いします。ファイル名にご自身の氏名を記載してください。
メールには、氏名、会員IDを明記してください。

◆主要国際保育系学会への若手派遣について◆

日本の保育学研究の進展のため、海外の保育学系の学会等で研究発表をする若手会員の支援をしています。

募集期間：1期：2月～5月、2期：6月～9月、3期：10月～翌年1月
金　　額：1名につき、上限額10万円
条　　件：筆頭発表者として研究発表を行う

申請希望者は、学会ホームページ「会員の皆様へ」→「各種委員会関係」→「国際交流委員会」→「国際交流若手派遣について」をご覧ください。http://www.jsrec.or.jp/?page_id=940

◆2024年1月　評議員選挙実施◆

2023年9月30日までに

・2023年度年会費納入
・会員マイページにログインし、登録情報および掲載情報の確認・更新

をお願いいたします。

投票は電子投票となります。選挙に関する連絡は、全て会員マイページおよびDMにて行いますので、必ず、**会員マイページにログインしてください。**

■第77回大会開催（予告）■

2024 年 5 月 11 日（土）・12 日（日）
神戸大学：オンライン開催（近畿ブロック）
大会テーマ：保育における Co-Agency を考える

◆第 77 回大会のお願い及び注意事項

・会場数に限りがございます。自主シンポジウムは 50 件、口頭発表は 200 件、ポスター発表は 800 件の制限を設けています。申込件数が大幅に超えた場合には、抽選を行います。
・各種申込みは、大会ホームページより Web 登録となります。期日や提出物に不備がある場合は、受理できませんのでご注意ください。
・申し込みをする際には、メールアドレスによる会員認証が必要です。

◆研究発表について

・発表時には、未発表であるものに限ります。発表申込み・発表論文集原稿提出以降、発表前に他団体において印刷・公表された研究は、発表することができませんので、ご注意ください。
・筆頭発表は 1 人 1 回に限ります。連名発表者となる場合には、筆頭発表も含めて 3 発表まで認められています。
・1 発表は筆頭発表者を含め 10 名を上限とします。
・発表の際、筆頭発表者は必ず在席時間に在席しなければなりません。
・発表申込みに際しては、本学会の大会研究発表に関する規程を遵守してください。大会終了後、審査の結果、違反のあった場合は、発表取り消しのご連絡をする場合があります。日本保育学会倫理綱領に基づいた発表をお願いいたします。
・発表申込みの受理結果は、2023 年 11 月下旬に大会ホームページに掲載いたします。会員各自で、ご確認ください。

◆自主シンポジウムについて

・登壇は 1 人 1 件です。筆頭企画者が日本保育学会の会員であることを確認してください。
・連名登壇者が非会員である場合、その方の大会参加費を、筆頭企画者が 2023 年 11 月 30 日までに納入してください。

◆発表論文集原稿提出について

・発表論文集原稿の分量は、1 発表につき、A4 判 2 枚です。おおよその分量を満たしていない原稿は、受理されない場合がありますのでご注意ください。

	自主シンポジウム	口頭・ポスター発表	大会参加のみ（早期参加登録）
学会年会費の納入	2023年9月30日		2023年9月30日
大会参加申込	2023年10月16日～11月7日		2023年10月16日～2024年2月29日
企画・発表申込	2023年10月16日～11月7日		—
大会参加費・発表登録費・自主シンポジウム開催登録費納入	2023年11月30日		2024年2月29日
原稿登録期限	2024年1月17日		—

第 77 回大会ホームページ
http://confit.atlas.jp/hoiku77

編集後記

新型コロナウイルスが 5 類相当となり、保育現場や大学・短大での授業もコロナ前の日常に戻りつつあるように感じます。一方、この 3 年間の中で、私たちは様々な業務（会議等）がオンラインで可能であることを学び、同時に、それによって捨象されたこと（雑談などでしょうか）の重要性も改めて実感しているところではないでしょうか。

広報委員長となって以後、広報委員会はすべてオンラインでの会議で進めているところです。オンライン会議の便利さを享受しつつ、よりよい会報の製作を進めて参ります。

編集：広報委員会
上田敏丈　亀山秀郎　木村創　坂田哲人
佐久間美智雄　柴田賢一　松山由美子

電子会員名簿
登録情報更新のお願い

2023年度より、1年に一度、電子会員名簿を作成いたします。
それに伴い、会員マイページの登録情報の内容が変更になりました。
2023年9月30日までに、会員マイページにログインし、
登録情報および掲載情報の確認・更新をお願いいたします。

◆初めてログインされる場合◆
「初めてログインする方はこちら」よりメールアドレスを入力し、パスワードを設定してください。

◆パスワードを忘れた場合◆
「パスワード再設定はこちら」よりメールアドレスを入力し、パスワードを設定してください。

◆ログインID（メールアドレス）を忘れた場合◆
事務局までお問い合せください。

会員マイページ

https://jsrecce.smoosy.atlas.jp/mypage/login

電子会員名簿には、以下の項目を掲載します

◆名簿に掲載する情報◆
氏名

◆各自、名簿に掲載することを選択する情報◆
所属、職名、専門分野、メールアドレス　※選択のない場合、メールアドレス以外は掲載となります。

2024年1月 評議員選挙実施
投票は電子投票となります

投票は会員マイページからアクセスする必要があります。
また、選挙に関する連絡は、全て会員マイページおよびDMにて行います。
登録情報に変更がなくても、一度会員マイページにログインしてください。

一般社団法人 日本保育学会

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-2 B,Rロジェ T-1
hoiku.info@jsrecce.jp